

西岡水源池・二度の危機

山田三夫

やまだ・みつお
1947年 滝川市生まれ
1985年 から西岡の自然
を語る会代表 日本野鳥の
1992年 から日本野鳥の
会札幌支部副支部長

私にとっての「身近な自然」は西岡水源池の自然である。しかし都市周辺の自然環境は絶えず危機にさらされている。西岡水源池の自然環境はこの十年のあいだに二度の危機をむかえた。そしてなんとか乗り越えたのであるが、いつまた何が起きるかわからない。私は「身近な自然」を大切にすることが、自然環境の保全に通じると考えている。二度の危機とはどのようなものだったのか、そして水辺の自然環境がなぜ守られねばならないかを考えてみたい。

若干の地誌

西岡水源池は、月寒丘陵を北に向かって流れる月寒川（石狩川水系）上流に造られたダム湖である。ダムは一九〇九（明治四十二年）、当時月寒村西山とよばれていたこの場所に旧陸軍が上用水源池として造ったものである（註一）。その後西山は一九四四（昭和十九）年の字名改正のさい西岡とされ、水源池も「西岡水源池」とよばれるようになったと思われる。戦後も月寒方面の水道水源として使われ、その役割を終えたのは豊平峡ダムができた一九七四年のことである。だから現在は旧水源池なのであるが地名としていまも使われている。五・八haの池を中心としたおよそ四十八haが西岡公園として一般に開放されたのは一九八〇年のことである。

一九八四年 貸しポート場問題

私は一九七九年からここで野鳥の観察をしていた。また日本野鳥の会札幌支部が定期的に探鳥会を開催していた。一九八四年十一月突然工事が始まった。市役所に問い合わせたところ、翌年四月

から二十挺の貸しポートを始める予定で券売所、棧橋を造成中とのことだった。野鳥の会札幌支部は陳情書、要望書を提出したのであるが、この段階で市職員組合から反対の申し入れ書が出されたのも異例のことであった。地元連合町内会、あるいはお母さんたちが集まる会などからも続々と反対の陳情が出されるなか、二月五日に地元住民、野鳥の会などの自然保護団体メンバーが集まり「西岡の自然を語る会」が発足したのである。正直に言ってこの自然を大切にしたいと考えている人がこんなにたくさんいるとは思っていなかった。

しかし七団体から出されていた陳情書の内容は、建物の基礎も取り払えというものからその有効利用を図れというものまで大きく違い違っていた。市議会の環境消防委員会では委員長と副委員長がこれの調整に入った。後に新聞報道でも「政治決着」と書かれたゆえんである。私としてはそれまでの交渉の結果がゼロになるのは何としても避けなかった。この時にわかったことだが、議会に対する陳情はいわば採択か不採択かしかないのであり、不採択になると結果はゼロとなる。妥協の道をさぐるのは愉快なものではない。結果として建物の基礎部は残るがポート場計画は中止ということでこの問題が決着したのであった。当会を窓口にし今後西岡水源池周辺の自然のありかたについて話し合いの場を持つという約束は、十分守られないかもしれないがそれはそれとして積み重ねていかねばならない大切なことでもあった。

このように私たちの会はじつに「素人っぽい」やりかたで初めての危機を乗り越えたのである。問題が表面化してからわずか四か月の短い期間に

当初は予想もなかった計画の中止という展開をみたことは、年度末をひかえていたとはいえず珍しい事例だったのではなからうか。しかしながら私たちが工事に気づき行動を起こさなければ、西岡水源池がポット場になっていたことを思うと今さらながら無然とした思いにとらわれるのである。

西岡の自然を語る会の活動

多くの地域自然保護の会は、ひとつの目的が果たされると雲散霧消してしまいがちではないだろうか。けれども私たちの活動は、むしろここからスタートしたともいえる。「まず私たちが西岡の自然をもっとよく知り、自然の中で楽しもう」ということでいくつかの活動を開始した。そのひとつが毎月第三日曜日におこなわれる「自然散歩」である。基本的には観察会なのであるが、肩肘はらずリラックスして自然を楽しもうというものだ。楽しんで始めて大切なものが見えてくるのではないだろうか。一二〇回を越え今も続けている。一方で生きものの調査を進めている。定例の自然散歩の機会をふくめ専門家をまきこみ植物、トンボ、水生生物などの調査活動を続けている。

せまい地域にだけこだわっているのは、活動の広がりがないのではないかと指摘も確かにある。だが私はあくまでも住民としての視点を大事にしたいのである。ごくごく小さな私たちの会が行政に立ち向かう時には、大きな自然保護団体とは違う立脚点を求めなければならないと考えている。

一九九〇年四月には環境庁が選定した「ふるさと生きものの里」の指定を受けた。ホタル、トンボなどの小動物が生息する環境と、住民活動とし

ての当会の活動が顕彰されたのである。しかしこのこと自体にはなんの御利益もないことが後でわかることになる。

西岡水源池の水辺環境

西岡水源池より上流の月寒川流域は、一部が水源涵養林に指定された民有林と国有林であり、源頭はこの国有林内にある。周囲は「ゴルフ場銀座」とでもいう状況にもかかわらず私たちが踏査してわかったことは、ゴルフ場から直接流れ出る支流がないことでこれは奇跡的なことに思えた。ヘイケボタルの一級の生息地としての理由がわかったような気がしたものだ。

現在の池の水深は浅深測量図を見ると深いところでも八十ないし一〇〇cmである。ダム湖の宿命は水を利用するために、水際線が一定せず植物の生えない部分ができることだが、旧水源池の池は二十年以上前から水位の変動はなく、建造されたから九十年近く経っていることもあり、人造湖でありながら天然の湖沼と同じような状況になっている。西岡水源池の自然を語ろうとする時には、池を中心にした水辺環境が大きなキーワードになる。

西岡水源池周辺にはさまざまなタイプの水辺環境がみられる。下流部から順に見てゆくと次のようになる。

- a 河床にごろごろとした比較的大きな石のある流れ
- b 池
- c ヨシが優占する湿原
- d 河床が火山灰の、まったく手つかずの蛇行する流れ

e 旧河道の小さな溜まり水

このように多様な水辺が森林にすっぽりと覆われるようにして存在しているのである。一七〇万都市のすぐ近くにあることを思うとこれは感動的なことではないだろうか。

a は一度直線化のための改修工事がなされている。しかし蛇籠での護岸でありヤナギなどの樹木で両岸が覆われている。b の池には公園化工事に際して刈り取るほどのヒシが群生していたが、現在はほとんど無いといってよい状況になった。これはやはり公園造成時に札幌市がソウギョを大量に放流したと関係があるかもしれない。池は上流側から堆積が少しずつ進んでいるようだ。c には川がいくつかに分かれて流れている。春先の大水でその流れが変わることもある。乾燥化したところにはササが侵入しているし、水がついたところの木は枯れるという自然の営みが繰り広げられている。d は小さな流れながらもまったくの原始河川といってよいとおもう。e は川の両岸の崖の下などに見られる小さな水たまりであるが、エゾサンショウウオの産卵場になったりエゾホトケがいたりするし、カモ類の採餌場にもなっている。

さまざまな環境があることは多くの生きものが住めるということ、トンボは道内の単一湖沼としては最多の三十九種が記録されている(註二)。また魚類も十二種、甲殻類三種、貝類四種のほかにもミズカマキリ、ゲンゴロウモドキ、オオコイムシなどの水生昆虫も数多く記録されている(註三)。鳥類は現在までに一二三種が記録されている(註四)。鳥類も水辺に生息する種が多く見られる。カイツブリ科二種、サギ科一種、ガンカモ科十四種、クイナ科三種、シギ科四種、カワセミ

科三種、セキレイ科四種など全体の二五パーセント近くが水辺があつてこそやって来る鳥で占められているのがわかる。

一九九〇年 月寒川改修工事問題

私たちの会が生きものの調査を進めていたのは、ポート場問題の時に記録したデータがおおいに役立つことを意識していたのは確かである。しかし再びこれらのデータを使わなければならぬ時があることを考えたくはなかった。

一九九〇年、西岡水源池下流の月寒川で河川改修工事が始まった。地元町内会に対する説明会にも参加したがその場は道路やフェンスなど生活問題に終始しており、生き物や自然環境の問題についてはほとんど話し合いがなされていなかった。新年度工事をひかえていたこともあり、当会はとて急ぎ札幌市に「月寒川改修工事に関する要望書」を提出した。内容は、当会など自然保護団体と話し合いの場を持つこと。新年度以降の計画は工事の中止を含め自然環境の保全に配慮して再検討することであった。

それまでの調査では主に池の下流の川に、当時北海道では記録のないコシボソヤンマの幼成虫が見つかった。採集マニア対策として一般への公表はしていなかったのだが、生息環境が根こそぎ無くなるとあつてはと登場してもらふことにした。大切なのは稀少種だけでないのももちろんである。工事予定区間はコオニヤンマをはじめとした生き物が非常に多く見られる場所であった。また兩岸に人家のあるところまではすでに工事は終わっていた。私たちは一方的に工事の中止を求めたのではなく、人と生き物両方にとってより良い

方法はないのかと問いかけたつもりである。

先のポート場問題の時には、西岡公園のほかに市内のそこかしこで造られる公園の「造園」的な問題や「札幌の緑」の質が見えてきたものだ。今回も何度かの市当局との話し合いの中でわかったことがいくつもある。どこにどんな生き物がいるかなど、なにも調べていないこと。市民の生命と財産を守るといふ河川事業の大義名分をひたすらかざすだけで、計画の段階で住民の意見などまったく聞こうともしないこと。それらは実績が無いと自ら認める「ホタル護岸」をなおかつ施工するという無神経さと同根のものである。

ちょうど一年ののち、私たちはあつけない幕切れをむかえることになる。要望を出した地元三団体に札幌市河川課から説明があつた。予定していた三〇〇mについては改修済区間との整合部二十mのみを施工する。木もその部分の四十本程度切るだけでとどめるというものだった。これは工事中止と同じものであつた。川のありかたについてさまざまな論議をよんでいた時代の風に助けられたのは確かであろう。そして九千万円規模の工事があつたとはいへ、最終的に住民の意見を汲み上げようとした結論を出した札幌市の対応は大いに評価される。そうとう難しいであろうと予想していた河川工事に対する反対要望がここまで受け入れられたことは信じられない気持ちでもあつた。

残りの工事が始まる前に工事区間の川ざらいをした。ヤゴなど少しでも上流に移そうとしたのである。市河川課に呼びかけたところ一緒に参加してくれるという。こうして官民合同のヤゴ移送作戦がおこなわれた。ヤゴを少しでも救うというだけではなく、なんとも心なごむ充実した作業であつた

たことが忘れられない。

新しい水辺空間の創出

西岡水源池を訪れる人は、年々増えているようだ。林からは鳥のさえずりが聞かれ、きれいな水が流れ、ホタルがいて、トンボはほんとうにたくさんいる。生き物と一緒にいることを実感できる場所であることが人をよび寄せるのではないだろうか。

さて現在の西岡水源池が自然に触れるのに良い場所だというのなら、「西岡水源池」をあちこちにたくさん造ればいいのではないかと私たちは考える。新しい水辺空間の創出である。前述したように、そもそも西岡水源池は人工的な空間だったのであり、何十年かの時間が一つの豊かな生態系を織りあげてきたのである。今すぐにでもそうした空間を準備することが、近い未来の札幌市民への大きな贈り物になるのではないだろうか。自然を守るだけではなく、あらたな自然を創り出す時が今なのかもしれない。

森林と水辺がセットされた自然環境は、西岡水源池の事例でみてきたようにじつに多くの生き物たちを育む空間となる。森林だけではなく、水辺だけでもなく二つの要素が複雑にからみあうことで、たくさん生き物を抱えることができるものようだ。

私たちは多分これから西岡水源池の自然の中を歩き、鳥や花をながめ、多くの生き物の気配を感じながらとぼと歩いて行くのだろう。三度目の危機がこないことを願ひながらである。

註一 寺尾隆雄：つきさつぷ、HTBまめほん五

- 十二、一九八九
- 二 平塚和弘：西岡水源池のトンボ統報、ワイルドライフ・レポート No.十五、二一六、一九九三
- 三 酒井健司：西岡水源池水中の生き物、日本野鳥の会札幌支部報一二九、四一七、一九九二
- 四 山田三夫・諸橋淳：西岡水源池鳥類リスト、日本野鳥の会札幌支部報一四三、八一九、一九九四